



三方よしの価値創出デザイン

サステナブル=協創関係

自己紹介



林 靖人

HAYASHI
Yasuto

職務・役割

- 信州大学 総合人科学系教授
- 副学長 (EM: エンロールメントマネジメント担当)
- 社会連繋推進本部長
- 全学横断特別教育プログラム推進本部長 [副専攻]
… 選抜型アントレプレナー育成
- リカレント学習プログラム推進本部副本部長 他

学歴・職歴

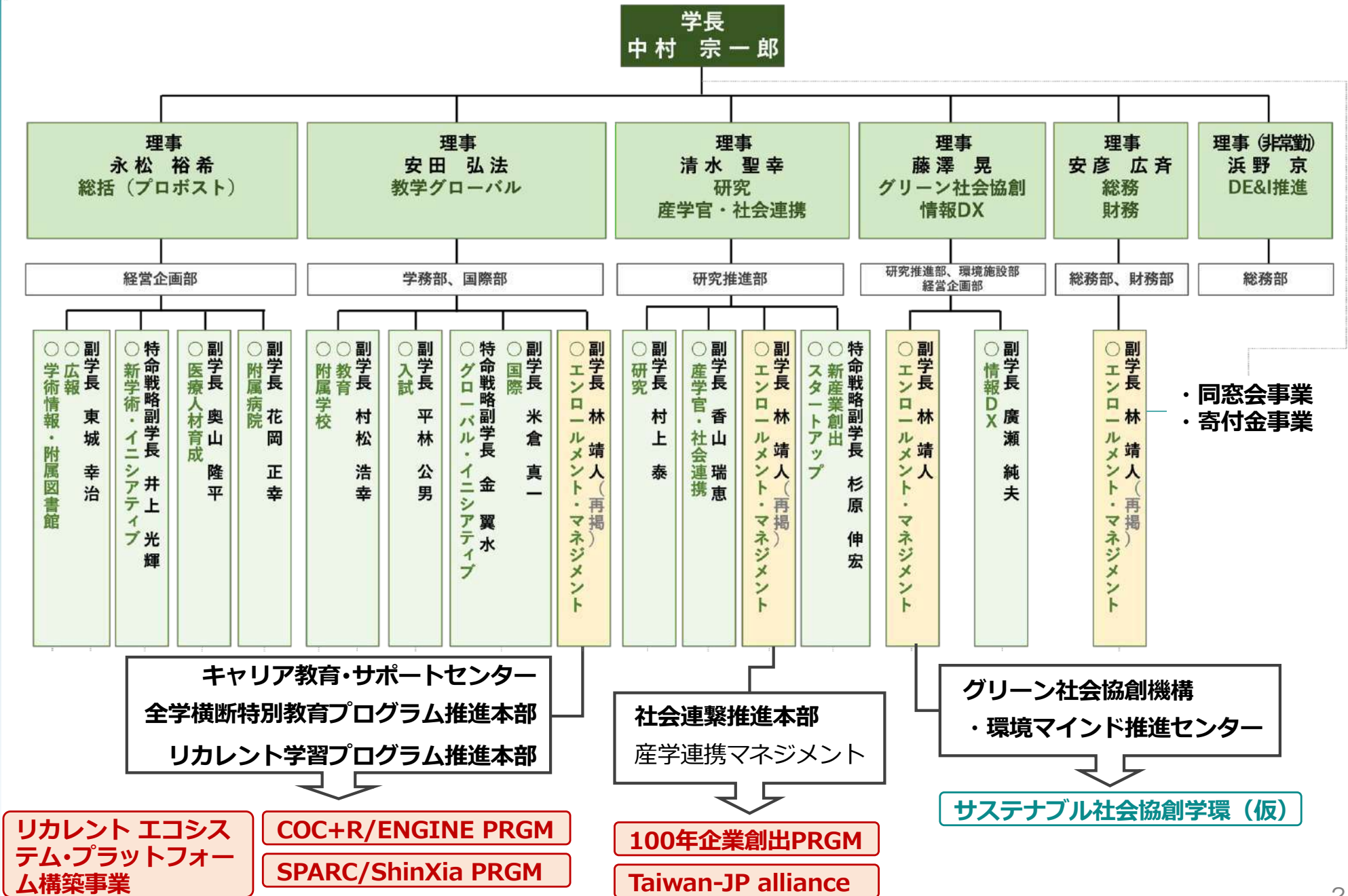
- 信州大学 人文学部
- 信州大学大学院 人文科学研究科【修士 文学】
- 信州大学大学院 総合工学系研究科【博士 学術】
- 特定非営利活動法人SCOP 理事・主任研究員 2003～
(信州大学 認定ベンチャー)
- 一般社団法人Edu-Connect円陣 2024.1.23～

- **感性情報学** (認知心理学、感性工学)
… 感情と行動を引き出す **シカケ、行動変革**
- 研究対象: **ブランド** (企業・地域・カテゴリ)

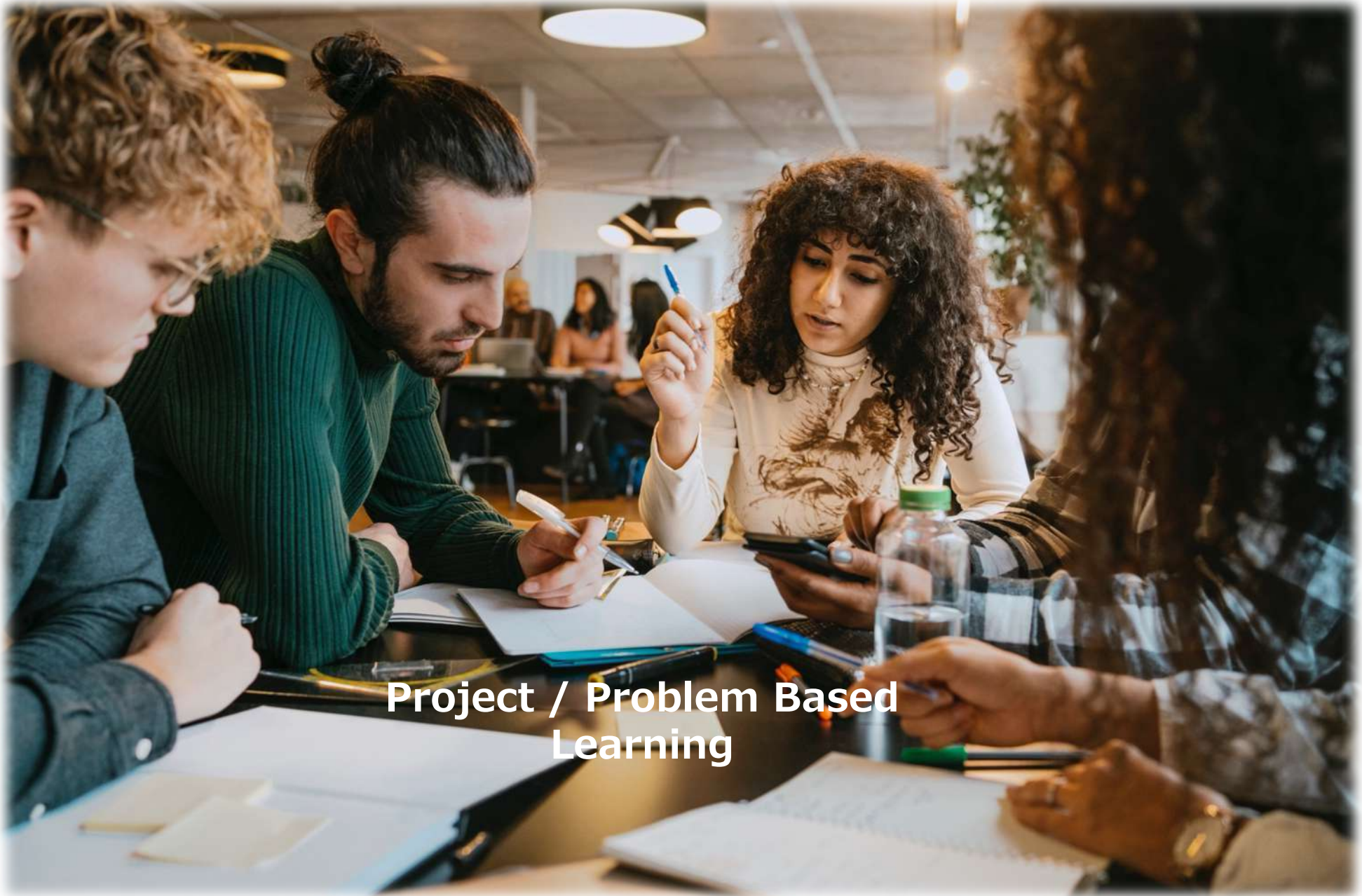
Feel free to
contact me 🙌



大学マネジメントと新事業創出



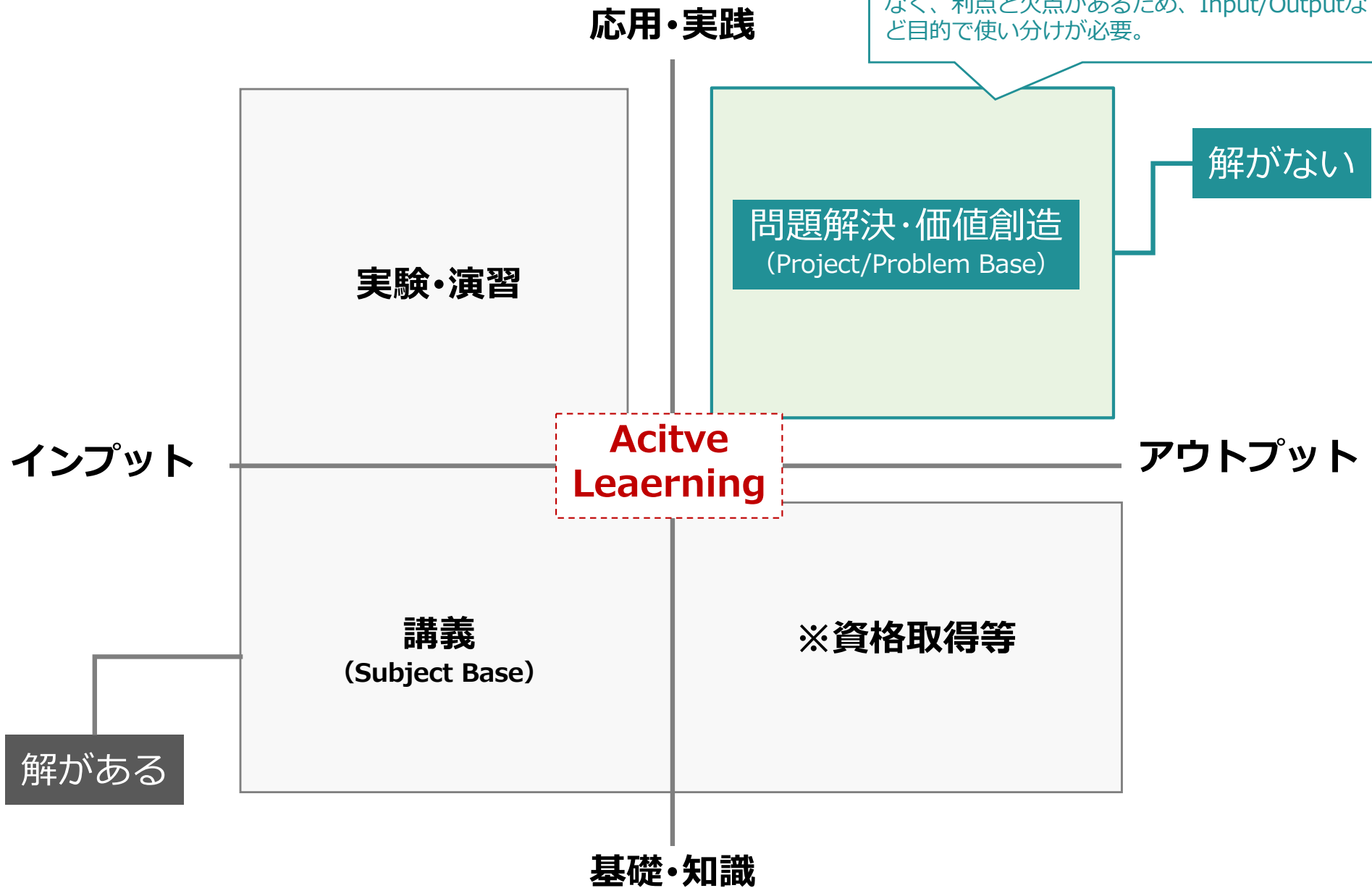
問：PBLはどんなイメージ？



Project / Problem Based
Learning

授業形式の分類

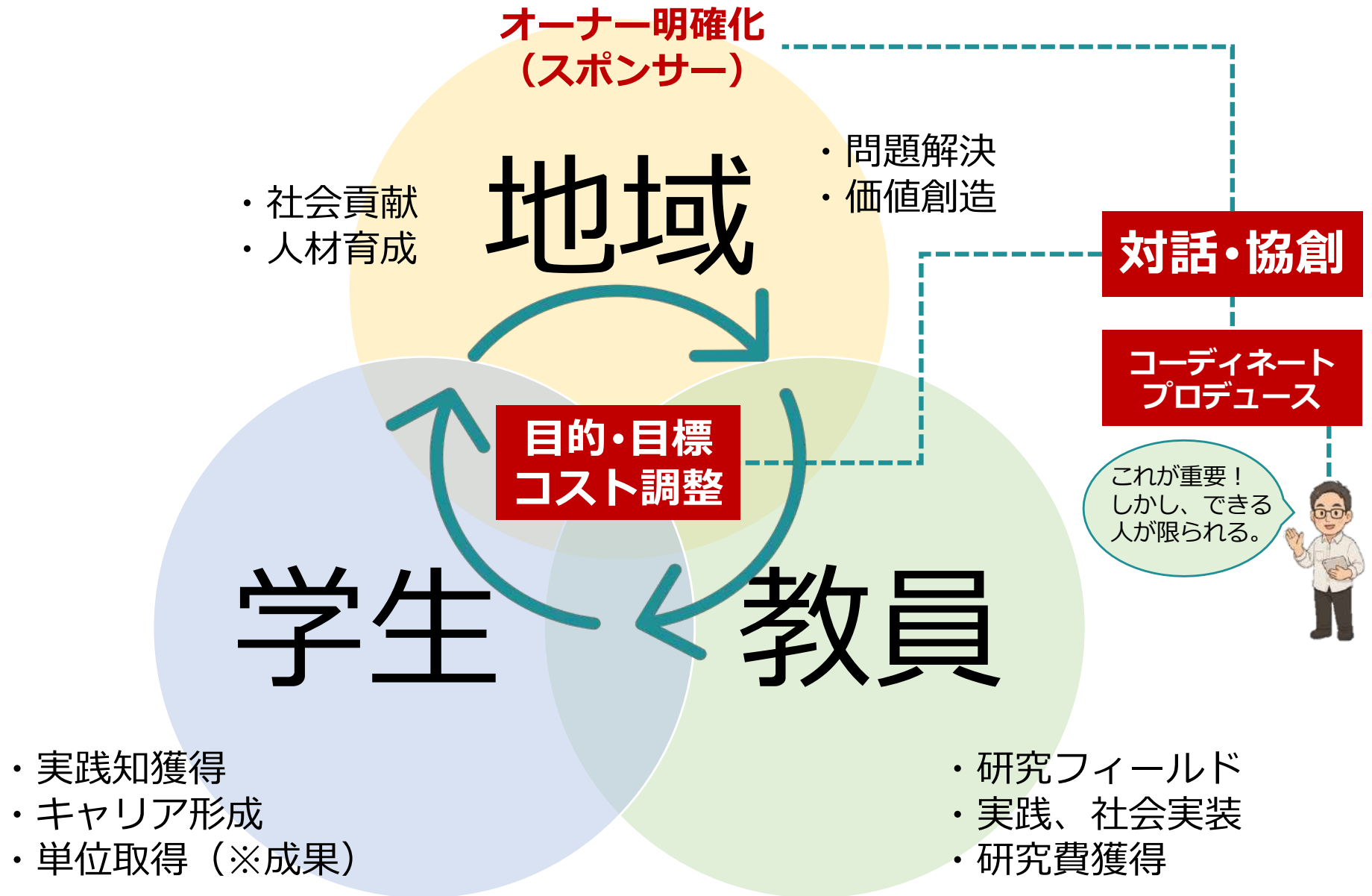
近年、Active Learningの導入が重視されるが、AL=全てPBLではない。PBLは、ALの一形態
(※Action Learning / Researchは、PBLに近い)
また、PBLが他の授業形態より優れている分けてなく、利点と欠点があるため、Input/Outputなど目的で使い分けが必要。



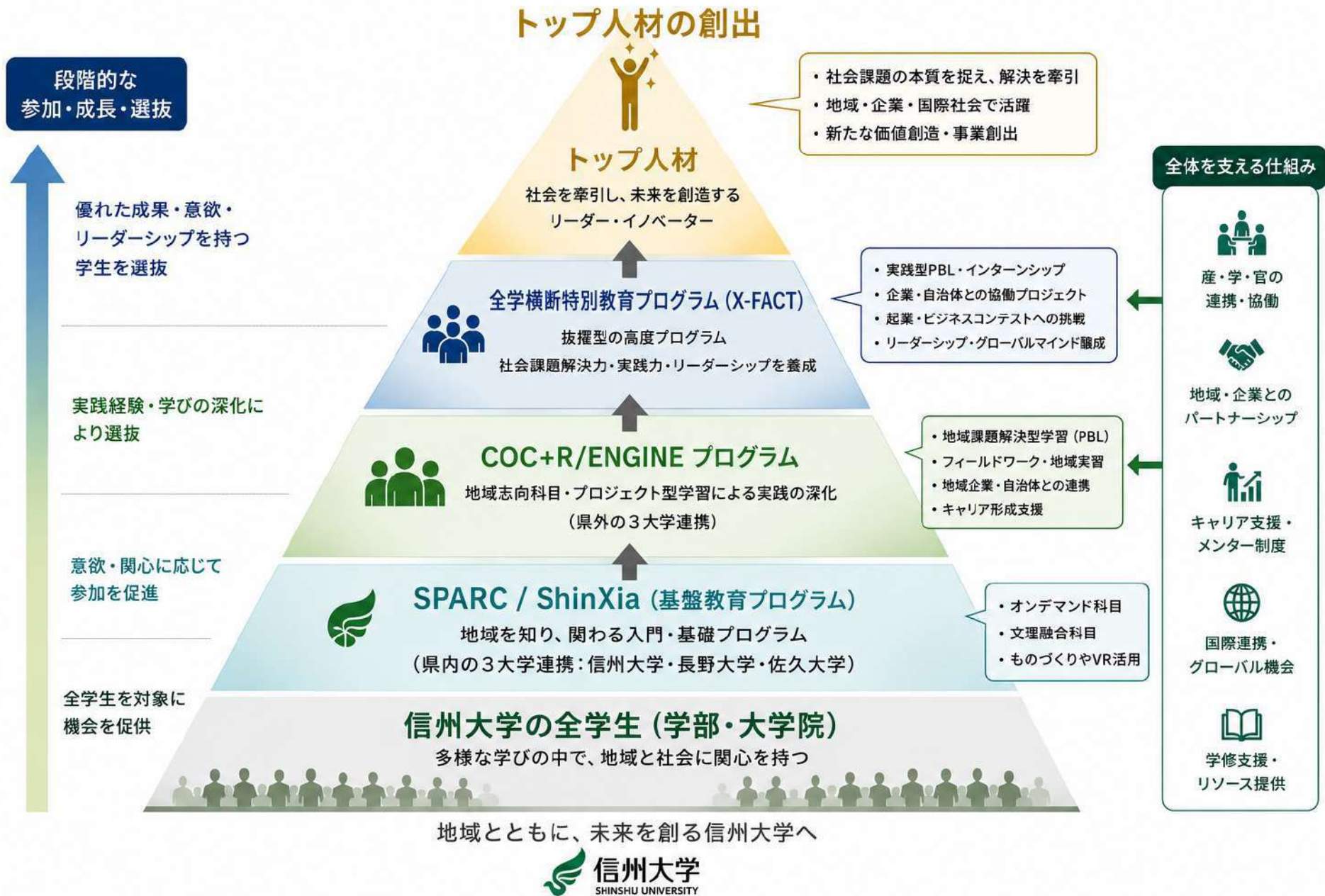
SBLとPBL・地域PBLの主な違い

観点	SBL (解がある)	地域PBL (解がない)
学習範囲	<ul style="list-style-type: none">・ 大学 (教員) が決める・ 明確・狭い・ 基礎～先端の研究知 (≒教科書など)	<ul style="list-style-type: none">・ 関係者全員で決める・ 曖昧・広い・ 企画・構想の手法 (※PJTに関連する範囲全て)
評価内容	大学：知識獲得等	大学 ：経験獲得 (知の実践) 地域 ：問題解決/価値創出
評価方法	Inputチェック テスト・レポート等	Output/Outcome チェック 提案や実践の価値付け
費用負担	固定	可変 (交通費や宿泊費)
教員負担	固定	可変 (FWや報告会調整)
進行管理	教員	全体：教員・ 地域 実行：学生
調整範囲	原則、教員と学生の2者間	大学 (教員) と学生と地域の 3.5者間で実施が必要

地域PBLのステークホルダーの関係性



ピラミッド型の人材育成



重要：PBLの目的・目標を対話・協創

PBL (Project/Problem-Based Learning) は、
講義形式 (SBL : Subject-Based) 等よりも様々なコストが掛かります。

しかし、得られるものも大きくなります。
例えば、学生の学びに対する動機付けや問題意識の向上、
オーナシップ獲得による課外活動への発展、
教員における産学官連携による実践研究への発展、
共同研究による社会実装など

さらには、パートナーとなる自治体や企業における
問題解決や価値創造、地域への貢献、
ひいては、将来の優秀な学生獲得など…

三方よしを一緒に創り上げておくことが重要

変化を必然と捉えること

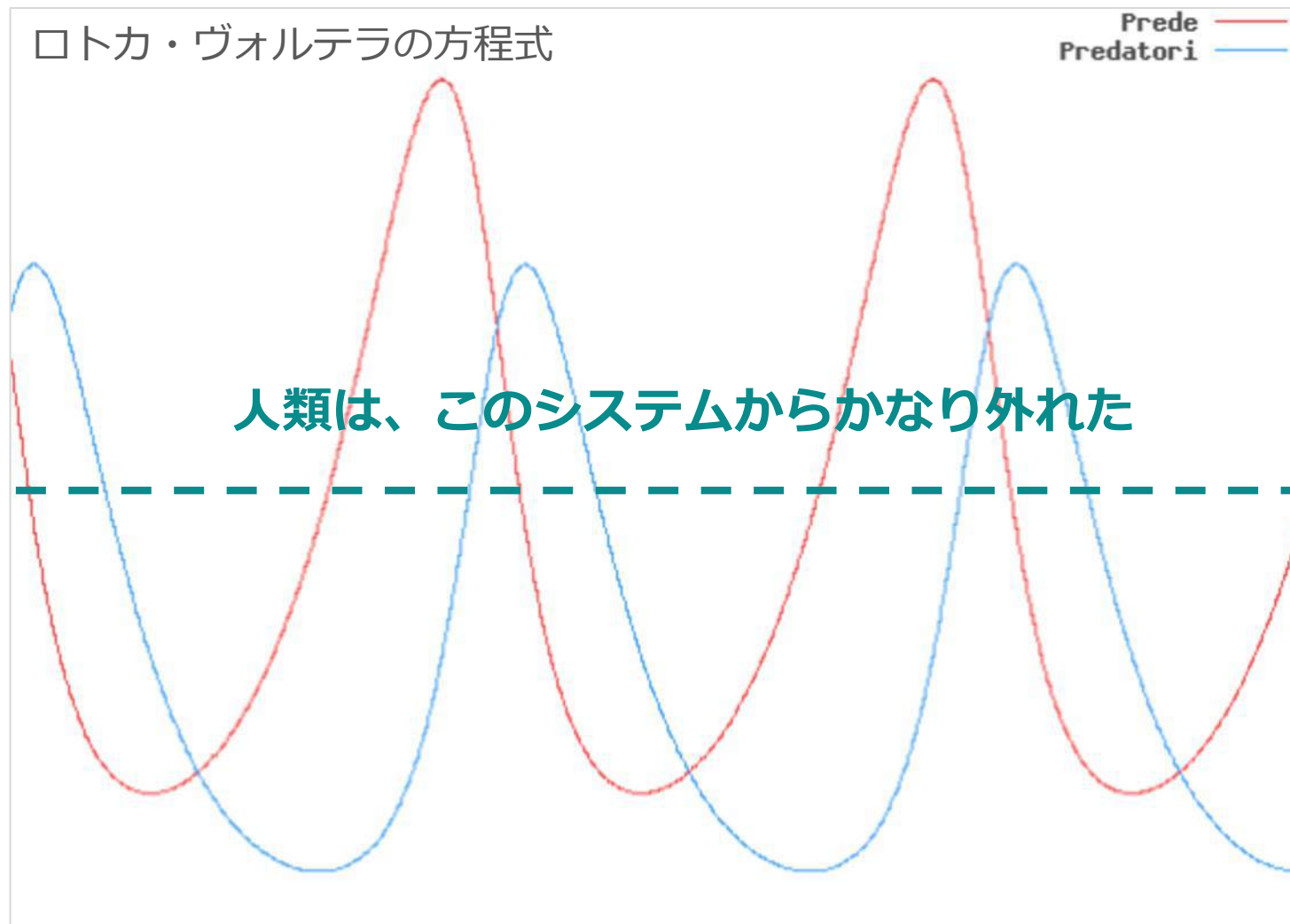
&

常に適応すること

次の時代のヒューマン・リテラシー

最強の持続可能なシステム

システム名「食物連鎖（Food Chain）」



変動は当たり前、必然を理解し、適応することが持続可能性

持続可能な社会に必要なものは？

解決の方向性

- ・ 中間・中庸・調和、ニュートラル化（±0の資源利用）を考える
- ・ ただし、自らが意思を持ち、環境変化を捉えながら最適化を考え、持続的にバランスを取る行為が必要



解決策

人類・世界レベルでの**価値観マネジメント**

持続可能性・安定の認識を変える！
世界は常に変化する、**変化に適応する**
行為こそが安定である



アルピコグループとのPBL事例

- 共通教育：アントレプレナー実践ゼミ
- ・2単位、主に1年生対象
 - ・後期（※前期に実施調整）

アルピコグループ・信州大学 連携協定

◎令和4年7月19日 締結

① 県内観光資源の磨き上げ

国際リゾート化や冬季観光の活性化、
リカレント旅行などの開発など

② 県内SDGs促進

地場農産物や業務効率化などの研究

③ 地域に貢献できる人材育成

多様な人材育成



“信州のブランド力向上”へ



(左) アルピコホールディングス株式会社 佐藤裕一社長
(右) 信州大学 中村宗一郎学長



目的やテーマを設定

協定の3つの目的を推進するため
「アントレプレナー実践ゼミ」を共同で実施
(共同研究契約を締結)

課題

松本エリアを中心とした
ウィンターシーズンの観光活性化事業提案



伴走者の設定 (※担当・役職等は当時)



アルピコ交通株式会社
経営企画室 上嶋 圭介

担当事業 アルピコ交通(株)経営企画室で、全社の予実管理と共に、マーケティング・インバウンド・MaaS・SDGs・DXなどの研究・推進に取り組んでおります。「交通」も観光の一つの要素になってきますので、新たなモビリティ含め交通視点で持続可能な観光を皆様と一緒に考えていきたいと思っております。

PR コロナ禍で観光を取巻く環境は大きく変化しましたが、新たなビジネスチャンスも生まれています。Z世代と言われる皆様のアイデアを元に新たな観光の可能性を見出していきましょう。



アルピコホテルズ株式会社
経営企画室 副部長 松木 嘉広

担当事業 アルピコホテルズ(株)経営企画室で、インバウンド、新規アイデア、産学連携を担当しています。このゼミでは観光業の広さ、素晴らしさを学生の皆さんに知っていただき、地域に貢献できる人になれるようなサポートをしていきたいと思っています。

PR “my dream,my journey”、私の以前勤めていた会社の標語です。自分なりに、引き出しをいっぱい作って、常に夢を持って、他の人には出来ない事をいろいろと考え、実行してきました。「自分の夢を旅する」そういう人生を送れるようになるといいですね。



アルピコホールディングス株式会社
経営企画部 堀内 敬志

担当事業 アルピコグループの新規事業開発、ホテル事業・リゾート事業の管理・支援等を担当しています。今まで進めてきたアルピコの各種プロジェクトでの色々な経験がありますので、このゼミの中でお話できればと思います（紹介できないものも多々ありますが...）。アルピコグループに関すること、観光に関することなど気軽にご相談ください。

PR 皆さんと一緒に信州の観光の活性化を検討・推進できることを楽しみにしています。若い力をもってすれば可能性は無限大だと思います。半年間一緒に頑張りましょう！

信州大学スタッフ・メンター (※学生は当時)

信州大学
産学官連携推進機構
学術研究・



柳澤 美彩
やなぎさわ みさ

氏名 仕事内容

信州大学社会連携推進本部で研究支援推進員として、自治体や企業と大学との連携事業や協定関連の事務を担当しています。普段は、松本キャンパスのメディカル展開センター内のオフィスに在席しています。このゼミでは、大学職員として事務的なサポートができれば・・・とっております。なにかありましたら、遠慮なくご相談ください！

PR

長く松本市で暮らしていますので、松本の街については市民の目線でお答えできることがあるかもしれません。松本に長く暮らしているからこそ、みなさんが松本のどんなところに興味を持っているのか興味があります。林先生のゼミでみなさんと一緒にさせていただき、私自身もきづきが多く、貴重な機会にいつも感謝しています。今年も楽しく、学び深いゼミになりますように！



宮崎 愛斗
みやざき まなと

長野県須坂市出身！
経法学部総合法学学科、環境法務コースの4年生です。普段は文化財保全の法制度等に関する学修をしています。また、全学横断特別教育プログラム、ローカルイノベーター養成コースの3期生にも所属しています。このゼミでは、メンターとして、学生目線から皆さんのフォローをさせていただきます。ゼミに関することだけでなく、学生生活に全般、副専攻に関する事など、何でもお気軽に声をかけてください！

ゼミの特徴は、鉄道を通じて、地域社会に直結していること。なので、授業は机上に終わりません。(私が持っているのは、2020年度実証実験で配布した「駅タグ！」です。) それ故課題解決は簡単ではありませんが、思いを共有することでJR長野支社の皆様や先生方をはじめ、その輪は拡がりアイデアは大きく膨らみます。ぜひ一緒に信州・松本地域の観光を考えてみましょう。

学生メンター



米澤 翼
よねざわ つばさ

長野県駒ヶ根市出身！
経法学部総合法律学科3年生で、環境法務コースに所属しております。環境法の中でも自然公園法や森林法に関心があり、実際に現地でのように適用されているのかについて調査しています。全学横断特別教育プログラムのローカルイノベーター養成コースでは、関係人口に着目した取り組みにいくつか参加しております。このゼミでは、一昨年受講生であったという経験を活かして、何かしらお役に立てればと思います。何でもお気軽に聞いてください！

幼少期から高校卒業までは首都圏で生活しており、大学進学を機に単身でUターンしました。なぜなら、長野県の水や空気のおいしさ、そして山が見える風景が好きだったからです！みなさんはどのような魅力を感じているでしょうか？
松本市には松本城をはじめとした自然と文化の観光資源が多くあり、是非フィールドワークを通じた体験型学習を楽しんでもらえればと思います。よろしくお願ひします！！



加藤 莉佳
かとう りか

東京都世田谷区出身！
人文学部2年生で心理学・社会心理学コースに所属しています。専攻で学んでいる心理学とは別で、全学横断特別教育プログラムのストラテジー・デザイン人材養成コースにも所属しています。このゼミでは、昨年度受講していた学生という立場で、皆さんをフォローさせていただきたいと思っています。何か気になることがありましたら、気軽にお声がけください！

信州大学への進学を機に松本に住んでいます。時間のある時には長野県の観光地をめぐって長野の知見を広げています。その中で、長野の人の温かみに触れることもあり、長野に暮らすことができた喜びを日々実感しています。このゼミでは長野に詳しくなり、地域に貢献できる仕組みを考えられると思います！半年間よろしくお願ひします！

フィールドワーク



美ヶ原温泉 翔峰視察



美ヶ原温泉 翔峰視察



アルピコ交通視察



アルピコ交通視察



ホテル ブエナビスタ視察



ホテル ブエナビスタ視察

フィールドワーク



PBLパートナーと連携し、具体的なサービスや事業について検討する



**フィールドワーク等は、一部時間内に実施するが、
ほとんどは、時間外で学生が相手先と調整し、実施をする
(※そのリテラシーは授業で伝える)**

フィールドリサーチ・実証実験



フィールドで顧客の観察、資源の発掘を行う



報告会の様子



日時：2025年2月21日（金）17:30～19:30

場所：アルピコプラザ 6F
「アルピコドローンアカデミー」

評価：アルピコグループ役員の皆様



全体の流れ

- ・ 16:30 現地集合
- ・ 17:30-17:45 開会・趣旨説明等
- ・ 17:45-18:30 学生プレゼンテーション
- ・ 18:30-19:00 ブラッシュアップ・フィードバック
- ・ 19:00-19:15 総評（佐藤代表取締役社長）
- ・ 19:15-19:30 記念撮影・ふりかえり
- ・ 19:30 現地解散



最終アウトプット：G・リーンキャンバス作成

リーンキャンバス完全ガイド：最速でビジネスモデルを検証する9つのステップ

価値の定義 (ステップ1~5)

1.2

1. 顧客セグメント & 2. 課題

ターゲットをアーリーアダプターに絞り、彼らが抱える上位3つの課題と代替手段を特定する。

アーリーアダプター

代替手段

3.4

3. UVP (独自の価値提案) & 4. ソリューション

顧客の課題に対する独自の解決策を、機能ではなく「利点」に注目して定義する。

利率

ソリューション

5

5. チャンネル

ユーザーにリーチするための経路 (広告、SNS、口コミなど) を検討する。

広告

口コミ

持続可能性の検証 (ステップ6~9)

6.7

6. 収益の流れ & 7. コスト構造

1取引あたりの収益シミュレーションと、開発・広告にかかる主要なコストを算出する。

収益

コスト

開発

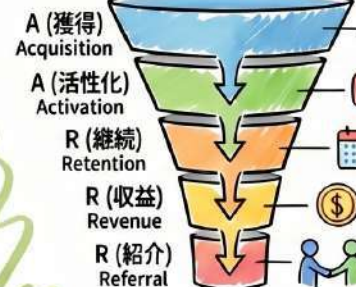
広告

シミュレーション

8

8. 主要指標 (AARRR)

獲得から紹介まで、サービスの成長を測定するための5つの指標 (AARRRモデル) を設定する。



9

9. 圧倒的な優位性

コミュニティや専門知識など、他社が簡単には真似できない独自の強みを明確にする。

専門知識

コミュニティ

グリーン・サステナブルな新価値創出

具体的なPBL成果の創出

未知に取り組み、新たな価値を創造する！

「アントレプレナーシップ」を養う “超実践型”ゼミ、その魅力とは!?

超少子高齢化により人口減少が加速的に進むなか、地域・社会はこれまでにない様々な問題を抱えています。しかし、その多くは明確な解が出されていないと言っていていいでしょう。

こうした中で、全学横断特別教育プログラム「ローカル・イノベーター養成コース」スタートアップ授業（導入授業）のひとつである「アントレプレナー実践ゼミ」では、地域・社会が抱える問題を把握、分析し、新たな価値を創造して解決策を提案する「アントレプレナーシップ」を養成。座学とは異なる、学生の主体性を重視する“超実践型”の授業手法が注目を集めています。2022年度からは、アルビコグループとのタッグ（共同研究）で、実際に新規事業創出を行い、ますます注目を集めるアントレプレナー実践ゼミ。その独自性や魅力などについて、担当教員や学生に話しをお聞きしました。（文・佐々木 政史）

注目されるPBLを導入教育ではなく、学習

新たな教育手法として、「プロジェクト/プロブレム・ベースド・ラーニング（PBL）」に注目が集まっています。これは、学生が実践的なプロジェクトを通じて知識やスキルを習得する教育手法です。講義や実験、演習といった一般的な教育手法は、ある程度決まった解が与えられています。対して、PBLは現実社会などの予め決まった解がない問題を扱うため、学生が自ら実践的な学習のなかで答えを求めていくこととなります。

信州大学ではこうしたPBLの教育手法を積極的に取り入れており、特にそれに特化しているのが、全学横断特別教育プログラム推進本部長の林靖人教授が担当す



「アントレプレナー実践ゼミ」の企画に関して、アルビコホールディングスの佐藤裕一社長らから助言を受けるアントレプレナー実践ゼミの受講者たち。

「アントレプレナー実践ゼミ」に出逢ったことが、信州大学に入学して最も良かったと思えることと話す人文学部4年生伊藤詩奈さん。

る「アントレプレナー実践ゼミ」です。これは多様な学部・学年の学生が受講できる「全学横断教育プログラム」のコースのひとつで、新たな価値を創造してビジネスや事業を立ち上げる起業家精神「アントレプレナーシップ」を養うための実践的な教育プログラムです。学生はチームに分かれて協力しながら、社会課題の解決を目指すかたちで、サービスや商品の企画を考えます。

担当教員の林教授は、この授業について、「教育ではなく、学習」と話します。教育は教員が学生に教えることですが、学習は学生が自ら主体的に学ぶこと。この“学ぶ力”を養うのが、ゼミの狙いだと思います。

地域・社会の課題解決に向けて革新的なことに取り組む外部人材を企業や行政から講師として招いていることも、このゼミの特徴です。外部講師の一人が、オンライン動画学習サービスを手掛ける株式会社ドコmgaccoで生涯教育事業に携わる山田崇さん。元塩尻市職員で、在職中は様々なプロジェクトを通じて

人文学部3年生木口屋和人は、アントレプレナー実践ゼミがきっかけとなり、地域課題解決に携わる仕事があったと考えられるようになった。



地域課題の解決を官民連携により推進し、“スーパー公務員”として注目を集めた方です。「少子高齢化が深刻な中山間地の多い長野県は、特に課題先進地。それだけに、そもそも解決すべき課題を見つづけることから取り組むことの重要性を学生には伝えています」と熱意のこもった表情で話します。

また、ゼミは、2022年に締結した信州大学と地域企業のアルビコグループとの包括的連携協定に基づく「PBL型共同研究」であり、将来人材である学生を育成しながら、彼らが主体となって地域・社会課題の解決を実現します。そのために同グループは、企業の視点から学生の事業企画案づくりにアドバイスを

を行い、優れた企画は実際のサービスや商品として事業化することも



ユニークな点です。

「学生ならではの発想は私たちに比べても大きな刺激になりますし、何より信州の地域課題の解決を目指す人材の育成に貢献できれば」とアルビコホールディングス 経営企画部 副部長の松木嘉広さんは、連携の意義を話します。

アルビコグループと共同開発「オーダーメイド・セイジンシキ」とは?

今回、このゼミで企画されたサービスが、アルビコグループで宿泊事業を行うホテルエナピスタの手により初めて商品化され、2024年12月か



上)オーダーメイド・セイジンシキの体験イメージ。アルビコグループのホテルでの特別な食事と酒を家族で楽しむ。左)大信州酒造の特別室での「聞き酒」、日本酒の文化や醸造についてのエピソードを聞きながら試飲する。

ら販売を開始しました。

これは伊藤詩奈さん（人文学部4年生）、木口屋 和人さん（人文学部3年生）、草間岳さん（経済学部4年）らが企画した「オーダーメイド・セイジンシキ」というものです。成人式は市区町村単位で開催され、同級生が集まり、首長や新成人代表が挨拶をするといったある程度決まった形式があります。一方、このサービスは、20歳を迎えた人と家族がプライベートに20歳を祝うもので、宿泊、食事、体験プランの内容をそれぞれが要望に合わせて、オーダーメイドでつくることができま

例えば、大信州酒造（松本市）の特別室で日本酒の文化や醸造方法を聞きながら試飲する「聞き酒」、ホテルでの記念撮影、フランス料理の特別な食事、家族揃っての宿泊といったプランが用意されています。

2022年に成人年齢が18歳へ引き下げられましたが、企画考案のきっかけはこの出来事を感じた「引っ掛かり」だったと、企画者のひとりである伊藤さんは話します。

「従来は20歳から大人がスタートするという意識が一般的にあったと思います。しかし、成人年齢が18歳に引き下げられたとはいえ、酒やたばこが許可されるのは依然として20歳からです。そのあたりがちよっと不明確になって当事者としてモヤモヤしたんです。それで、もう一度、20歳という年齢を大人としての自由と責任が生じる年齢だと再定義したいという思いがありました」

オーダーメイド・セイジンシキは、成人年齢の引き下げという社会変化の中で生じた当事者の違和感をもとに、新しい価値を創造し提案したものと言えるでしょう。

こうした価値創造力に対して、アルビコグループ 経営企画部 部長の上嶋圭介さんは「私たちにないもの」とPBL型共同研究に大きなメリットを感じています。

企画者の学生である伊藤さん、木口屋さん、草間さんは、このオーダーメイド・セイジンシキを地域へ貢献できるサービスにしたいと考えています。例えば、体験プログラムに酒蔵訪問を組み入れたこともそのひとつ。昨年、若者の酒離れが進んでいますが、特に日本酒は顕著で、県内の酒蔵としては深刻な問題になっているそうです。こうした課題に対し、オーダーメイド・セイジンシキを通じて新成人に日本酒に触れる機会を提供していきたいと考えています。ちなみに、伊藤さんらは、日本酒を口にしたことがありませんでしたが、今回の企画を通じて親むようなうに、「酒蔵や地域によって、全く味わいが異なることに驚いた」と新たな気付きがあったようです。



アントレプレナー実践ゼミの集大成である、事業提案報告会の様子。

実践的な視点、課題の自分ごと化…学生は成長に手ごたえ

アントレプレナー実践ゼミの受講、そして今回のオーダーメイド・セイジンシキのプロジェクトを通じて、学生は自らの成長の手ごたえを強く掴んでいるようです。

草間さんは「学生は頭の中での抽象的な考えに留まる場合が多いですが、実社会での具体的な場面で実践的に考える経験させていただきました。これはやはり、企業と組んだPBL型共同研究のメリットですね」。こう話し、自分とは異なる立場の視点から考えることの重要性を実感しています。

伊藤さんは「実社会の実践に即したサービスを考えることは、社会課題を自分ごととして捉えるうえで、とても貴重な経験になりました」と充実した表情。

木口屋さんはゼミでの経験が道路に大きな影響を与えたといいます。「PBLを重ねるなかで、地域課題の解決に携わる仕事をしたかと思うようになりました。それで県最南端の根羽村にインターンに行ったんですが、今度はそこで自分の中の課題が見えてきたので、もっと見分を広めていきたいです」と意欲は充分です。

地域・社会の問題解決、そして新たな価値の創造に向け、学生が自ら主体的に事業の構築を目指す“超実践型”の「アントレプレナー実践ゼミ」。解なき時代に求められる次世代の人材が、このゼミから次々と生まれています。



ゼミの担当教員である全学横断特別教育プログラム推進本部長の林靖人教授（左）と、ドコmgacco社員で外部講師を務める山田崇さん（右）。林教授は「山田さんなどの外部講師の知見がこのゼミに活気を与えている」と話す。

各回授業での「きづき」

Day1	内容について説明	Day2	内容について説明
土台が大切	チームで考えるときもチームビルディングが大切だし、テーマに対してアンサーを出すときも定義が大切で、土台が固まっていないものの上には何も立たないと思った。土台を完成させた上でどんな方向に向かうのか、自分事ながらワクワクしている。 1年ぶりのTAKIVIVAにテンションが上がっているし、昨年行けなかったルオムの森に行けたりBBQができたりして案が良かったです。	自分の苦手	去年参加して指摘された「具体化」や「言葉遊びだけではない中身」という苦手分野が、今年もやっぱり苦手だなと思った。自分の得意なこと・強みにしたいことを見つかるのも合宿の醍醐味だけど、自分の現在地を再認識することも今の自分にとって大事だし、合宿後にはマイナスから0に、0から1にしていくプロセスを考えて再出発したい。
人間の存在意義	自然は人間を必要としないという強いワードがインプットの中にあったが、人間が存在する意義について思考したとき、特に人間がいなくともまわるし、むしろ自然が守られると考えた。それだけ人間が自然の摂理を逸脱した存在であり、人間が食物連鎖を外れてしまったものであるため、リトリートでは人間を一旦、自然の一部で感じさせるように徹底的にもどすことをしてみるのもおもしろいと感じた	ミーティングの効果の最大化の要因	今回、僕ら班は他のどの班よりも進んでいる状況となった。この理由を考察するに、ミーティングの手法が非常に効果的だったと考える。1時間に1度は適度に休憩を入れ、話し合う場所は環境も適度に変えているため、脳が刺激され、非常にアウトプットしやすい状況であった。適度に体を動かすことにより、血流が改善され、脳がより働く状況を作り出すことができた。また 睡眠時間を十分に確保したため しっかりと脳が機能する状態を維持することができた。
リトリート	リトリートの意味に関して私は簡潔に考えていた。しかし、他の人の話を聞く中で定義はさまざまであり人によって考えてる事業のゴールが違うことがわかった。今後考えを照らし合わせたのち、柔軟な考えを発表できるように3日頑張りたい。	事業の先にあるもの	今日のディスカッションの中で、大まかな事業の基盤を整えることはできたと感じる。しかし、まだまだ先生方に言われた課題は多く残っているし、残り2日では到底満足できないだろう。特に、事業の対象、内容については多く誉められたが逆に指摘も多かった。しかし、少しでも良いものができるよう、班の方と力を合わせて行っていきたい。
疲れの程度	リトリートが必要と気付けるというはある程度疲れの無い余裕のある状態なのではないかということが気になった。私自身の人生でリトリートが必要だったと感じる場面には離れようという思考にはなれなかったからだ。どの程度の疲れの人をターゲットにするのか、ペルソナを特定することが大切になりそう。	具体と伝え方	伝えるために必要な具体が気になった。中間発表で準備はしていたが自分たちの伝えたいことが伝わっていない感覚があった。そしてフィードバックでもペルソナを具体化した方が良いというお話を頂いてどのような形でも良いから具体化を一旦試してみることが大切だと感じた。最終的に数を出すという手段をとったので明日は絞っていくこと、生の声をきくことをしたい。
仲間の思いを聞く重要性	まずは他社理解の前に、一緒に取り組むチームの仲間の考えを聞くことが大切であり、そのためには一緒にご飯作りをする重要性を教わった。実際に、仲間と話をすることの密度の濃さを私自身実感した。まず課題が与えられると、仲間より前に課題解決を考えてしまいがちであったので、気をつけたいと感じた。	実際に体験しないとわからない	まーさんのリトリートの体験を聞き、初めてリトリートのイメージができた。私はリトリートをやったことがなく想像で考えていたが、頭の中で想像することには限界があり、実際に体験した人から聞くことは非常に価値があることを実感した。
知っている人には贈与が発生しやすいことに共感した。	ある程度知っている人のほうが贈与が発生しやすい点に共感した。実際、全く知らない人より、ストーリーがある程度知っている人のほうが自分自身贈与しやすい。また、ある程度というのはストーリーやその人の人となりなどである。	きたもっくならではのものに作り出せば良いことに気づいた。	自分たちの班として、きたもっくでなければいけないことを考えることが難しかった。しかし、先生方の話を聞き、必ずしも探し出さなければならぬものではないことに気がついた。ないならここから初めてブランディングしていけばいいということを教えてもらい、とても腑に落ちた。例えば、この地域資源として森林が第一に挙げられる。これは、どの地域にもあるため、ここでしかだめというわけではない。しかし、ここから始めることにより、ブランディング化できる。また、この地域発の事業として全国展開もすることができる。
目の前のことに「興味・関心」を持つことで、ストーリー性や必然性が生まれることを意識する。	自分たちの事業テーマや自分たちなりの定義を考える上で、難しく考えすぎて頭の中がぐるぐるしていた。しかし、それよりもまずリトリートそのものに興味関心をしっかり持つことが大切だと気づいた。それによって、ストーリー性や必然性がついてくると思った。	コア層がどんなヒトかを定めて、ルオムの森をブランディングさせることがリトリートの鍵。	事業提案の内容やルオムの森の付加価値を増やしていくと、ペルソナが勝手に広がってしまうと思ったが、コア層を確立すればそれは起きない。そして、「どこでもできる」はそれはそう。だから、ルオムの森を私連なりにブランディングする。そのために未経験とヒアリングによるevidenceがいると思う！
相手の顔が見えて相手のことを知らなければ、人は関心を持ってない	自分のこととして捉えられなければ、どれだけ社会的に意味のあることであっても価値のないものになってしまう。逆に、社会的に見れば価値のないことでも自分ごとになれば価値は生まれる。自分にとっての「リトリート」の定義はできたので、それをカタチにすることが次のステップ。誰を対象にしてどのようなプログラムにするのか、ターゲットの顔を明確にして話し合いを進めていきたい。	当事者意識とターゲットの生の声を聞く	当事者意識があると、提案が具体化しビジョンや目指す方向がはっきりした。また、自分たちの想定や企画に対して、ターゲットはどのくらいいるのか、ターゲットたちにとってこの提案に価値はあるのかというのは、本人たちに聞いてみなければ分からない。生の声が聞けたから分かったことを、企画の中に落とし込みたい。
自分が圧倒的当事者意識を持たないと、血の通ったプランを考えられない	一日目にして、どういう方向性で考えていきたいか議論していくとき、どうしてもインプットしたことをそのまま使おうとして、どうも腹落ちしないまま、インプット内容に「従ってしまう」という状況で、話していてもイメージが湧かなかつたり、どこか足元が緩い感じがしていた。ここで、必ず提案が採択され、実行しなくてはいけないとなったときに「やりとげられる」「継続できる」ものになろうと考えてみた。すると当事者意識をもって、自分の中で納得感をもって思考することができた気がしている。	自分の課題解決を企画にあげると地に足がつくが課題も	班の方向性と、コアな教育学部の悩みがリンクしたため、そこにクローズアップして事業を考えてみることにした。となると当事者の意識が湧いてくるため、「これは良い」「これは違う」というようなことを、自分の身をもって分類することができる。しかし班活動という場面において、他の学部のメンバーを置いてしまうというデメリットもある。教育学部のみ！というには、当事者である自分は思考しやすいが、そうではないメンバーからすると、なかなかことをイメージすることができず感じてしまう。この課題感には常に意識していくようにしたい。
人は相手の顔が見えると優しくなる	飲み会の割り勘の例であったように、人は相手の顔が見えるとその人に優しくなったり、興味を持つという話を聞いて感心した。人でなくとも、ヒグマを保護する団体のツアーに参加することで、これまでニュースでは耳にしていたが関心を向けなかった脱炭素に注意を向けるようになる例もある。やはりリアルを体験することが興味を持つには一番だ。逆に、対面では絶対に言えないようなことを、ネットで書き込んでしまう、という現代社会の問題もある。地域活性の場合でも、ただ来てもらうだけではなく、観光客が現地の人々と対話することで、よりその地域を応援しようという気が強くなり、その人自身の記憶もより深くなるのではないかと。	綺麗な口ジックと面白さ	今日は途中で綺麗に歯車が噛み合い、知識のリトリートをテーマに、固まった考え方が社会発展を妨害するのはなぜか？という問いを立てることができたが、その後何かお堅い感じになってしまい、面白さをうまく見出すことができなかった。きたもっくさんのニーズに近づくことができた気がしたが、事業としては物足りない感じになってしまった。綺麗な口ジックは、必ずしも面白いアイデアを生み出すとは限らない。逆に、中身がしっかりした提案であれば、後付けで口ジックを構築することもできるという話を聞いたので、今後はそのような考え方も身につけたい。一番凝り固まった考え方をしていたのは、自分だったのかもしれない。

Q&A フィードバック

自転車通行空間の整備方法

自転車通行空間の整備方法は、「自転車道」「自転車専用通行帯」「車道混在」の3型があります。

「自転車道」は車道と自転車通行空間を構造的に自動車と自転車が通行する空間を分離させる方法、「自転車専用通行帯」は外側線や区間内の塗装によって自転車通行空間を視覚的に区分させる方法、「車道混在」は矢羽根型路面標示や自転車ピクトグラムを用いて、車道内の自転車が通行する位置と方向を視覚化する方法です。

なお「車道混在」の整備は、あくまで自転車が通行する位置を視覚化するものであって、整備によって自動車に何らかの交通規制が伴うものではありませんが、自転車事故の抑制が期待できます。



左から、自転車道（出典：兵庫県）、自転車専用通行帯（松本市撮影）、車道混在（松本市撮影）

マイクロツーリズムとシェアサイクリング

市内の自転車通行空間整備は中心市街地から着手し、徐々に郊外へ広がっていきます。整備の優先度は、自転車事故の発生率や自転車通行空間のネットワーク化の観点から決定しています。

参照（松本市役所HP）：<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/soshiki/221/2899.html>



松本市は、自動車を優先した社会からの転換、環境負荷の少ない集約型都市構造の実現を目指しています。新たな移動手段の一つとして、平成31年3月27日水曜日から、OpenStreet株式会社と協働で、シェアサイクル事業を開始しました。

シェアサイクルとは？

決められた専用駐輪場（ステーション）であれば、24時間いつでも、自転車を借りたり、返したりできるサービスです。最寄りのステーションで自転車を借りて、勤務先や駅周辺のステーションで返却できます。

松本市内では、松本駅お城口広場・松本バスターミナル前のほか、商業施設の周辺や病院などに設置されています。



<外部リンク>

【こちらをクリック】シェアサイクル「HELLO CYCLING」のホームページ

参考：評価ルーブリックの開発（予定）

ENGINE事業 人材能力評価指標

ver. 1.0 (2021.4)

		項目	定義		1	3	5
創新 innovation		現状を把握する力	現状を広く・深く理解し、問題を特定する	基準 特定の情報を正しく理解することができる 具体例 ・与えられた情報から考えることができる ・地域・特定のテーマに関して情報を理解することができる	最もある情報の全体像を正しく理解することができる 具体例 ・自ら必要な情報を収集することができる ・地域の情報を幅広く収集し、その関連を見いだすことができる	最もある情報から問題を特定することができる 具体例 ・自ら必要な情報を収集することができる ・地域の情報の関連を理解し、問題を特定できる	
		目的を設定する力	現状に関いを立て、あるべき状態を描く	基準 自らの認識をもとに、あるべき状態を描ける 具体例 ・自らの成長や自己実現に向けて、自らのあるべき状態を言語化出来る	他者の認識も踏まえ、あるべき状態を描ける 具体例 ・協働者の意見を踏まえつつ、自分と自組織のあるべき状態を関連付けて言語化出来る	社会としてのあるべき状態を描ける 具体例 ・地域・社会の意見を踏まえつつ、自分、自組織、社会のあるべき状態を関連付けて言語化出来る	
		変わり続ける力	好奇心を持ち、常に自らを新しくし続ける		基準 インプットを遡うこと無く行うことができる 具体例 ・新たな情報を得ることに抵抗を持たず、インプットを楽しむことができる	自らの関心ある事項を継続的にインプットしている 具体例 ・関心のある分野の最新情報を常にキャッチアップしている	自らの関心の有無に依らず、継続的にインプットしている 具体例 ・関心領域に加えて社会の潮流など、幅広い情報を常にキャッチアップしている
連繫 connection		繋ぎ合わせる力	複数の情報を組み合わせ、新たな価値を生み出す	基準 近しい領域の複数の情報から連繫を考えることができる 具体例 ・自分の専門分野において、物事の相関や因果を考えられる	近しい領域の複数の情報から連繫を考え、新たな価値を生み出すことができる 具体例 ・自分の専門分野において、物事の連関から発展させて新たなテーマを考え出すことができる	異なる領域の複数の情報から連繫を考え、新たな価値を生み出すことができる 具体例 ・自分の専門と異分野の物事の連関から発展させて新たなテーマを考え出すことができる	
		巻き込む力	他者を巻き込み、動かすことができる	基準 目の前の相手を惹き動かすことができる 具体例 ・初対面の人にも聲をくらす姿し話せる ・近しい友人の行動に影響を与えることができる ・目の前の人を動かすための魅力的な話をするすることができる	周囲な集団の中で、組織を率いて動かすことができる 具体例 ・同年代、同じ地域の人と協働しながら物事に取り組みることが出来る ・多くの人を動かすための魅力的な話をするすることができる	異質な人も含む集団の中で、組織を率いて動かすことができる 具体例 ・年代、地域、立場の違う人と協働しながら物事に取り組みることが出来る ・多様な背景の人を動かすための魅力的な話をするすることができる	
		役割を果たす力	組織内での、自らの立ち位置を理解し、適切に振る舞うことができる		基準 組織内での自らの立ち位置を客観的に認識できる 具体例 ・組織における、自らの立ち位置を客観的に捉えることができる	組織内での自らの立ち位置を客観的に認識し、求められる行動を取ることができる 具体例 ・組織における、自らの立ち位置を客観的に捉えて、役割に合った行動を取ることができる	組織内での自らの立ち位置を客観的に認識し、組織を活性化する働きかけができる 具体例 ・組織における、自らの立ち位置を客観的に捉えて、自分と他者の行動が促進されるための働きかけができる
突破 breakthrough		粘り強くやり抜く力	一度決めたことに責任を持ち、物事を粘り強く突き詰め、アウトプットする	基準 短期間であれば、一度決めたことに取り組み続けることができる 具体例 ・プログラム内の教習中はミーティングに参加し主体的に取り組むことができる	プログラム期間であれば、一度決めたことに取り組み続けることができる 具体例 ・プログラム期間中はミーティングに参加し主体的に取り組むことができる	プログラム外や終了後でも一度決めたことに取り組み続け、周囲から信頼を得ることができる 具体例 ・プログラムの強靭力が無い期間でも主体的に取り組むことが出来、周囲もその取り組みを評価している	
		失敗を恐れず、挑み続ける力	自らの限界を決めずに、一歩踏み出して取り組む	基準 失敗を許容し、恐れぬ気持ちがある 具体例 ・成功可能性を気にせず、失敗することを怖がらず、とにかくアクションを試みることが出来る	課題もしくは協働者のどちらかについて、コンフォートゾーンを越えた挑戦ができる 具体例 ・自分が対峙したことのない課題に挑戦しやすい人と挑戦する ・自分が対峙したことのある課題に対して、協働する難易度が高い人と一緒に挑戦することができる	課題/協働者どちらもコンフォートゾーンを越えた挑戦が出来る 具体例 ・自分が対峙したことのない課題に対して、協働する難易度が高い人と一緒に挑戦することができる	

“Rubric for the ENGINE program.” by Educational Program Committee in ENGINE is licensed under CC SA-BY 4.0.

発展的取り組み：国際的なPBL等も協創

アルピコグループ：台湾ハッカソンへの挑戦状

長野・松本エリアの観光誘致と航空需要創出を目指す課題

2つの主要ミッション

長野・松本エリアへの観光誘致

台北メトロとの連携を活かし、台湾から信州エリアへの観光客を強化する。



台北メトロ
×
アルピコ交通

両社の連携による広告、イベント、周遊キャンペーンなどの具体策を提案する。

松本空港への直行便就航

観光需要を掘り起こし、将来的な台湾～松本間の航空路線開設へと繋げる。



アイデア検討のヒント

台湾人の「好き」を捉える

自然、温泉、アート、食文化、アニメ・サブカルなどへの嗜好性を考慮する。



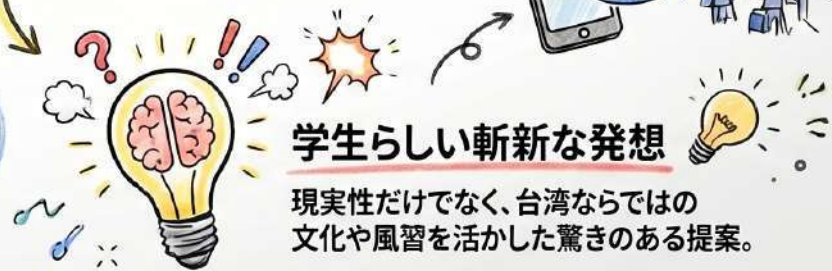
SNSとデジタルマーケティング

ターゲットに届く情報発信と、空港利用を促進する仕掛けを構築する。



学生らしい斬新な発想

現実性だけでなく、台湾ならではの文化や風習を活かした驚きのある提案。



発展的取り組み：広域圏での取り組み

1 日本・韓国を取り巻く社会的背景

なぜ今、大学と地域の協創が求められているのか

	日本 (2010年代~)	韓国 (2020年代~)
人口動態	急速な少子高齢化・人口減少	極めて低い出生率・人口減少
地域構造	東京一極集中・地方の過疎化	ソウル首都圏への人口集中・地域格差
産業構造	地域産業の担い手不足 産業の空洞化・事業承継問題	地域企業の人材確保難 産業構造の転換・競争強化
大学を取り巻く環境	18歳人口の減少・地方大学の存在意義の再定義	大学再編・地域大学の存続課題 高等教育の質的転換の必要性
政策の方向性	地方創生・地域人材育成 大学の地域貢献の強化	地域主導型大学改革 (RISE) 地域イノベーション創出
大学への期待	地域課題の解決・地域定着人材の育成 産学官連携のハブ機能	地域課題のエンジン・人材循環の創出 地域とともに未来を創る中核機関

共通する本質：大学を「教育機関」から「地域の未来を共に創る中核機関」へ転換すること

2 従来の地方創生の課題（行政区画による分断）

① 縦割り・分断
都道府県・市町村単位での取組が分断され、連携が限定的

② 人材の取り合い
地域間で人材・企業を奪い合い、大きな流れを生み出せない

③ 価値創出の阻害
複数地域の資源を掛け合わせる事が行政の壁で進みにくい

人の流れを束ね、複数地域の「かけ算」で新しい価値を生み出す仕組みが必要

3 3大学が広域で連携し、産学官金民がつながる

信州大学
(長野県：山・高原・農業・ものづくり等)

富山大学
(富山県：海・港・ものづくり等)

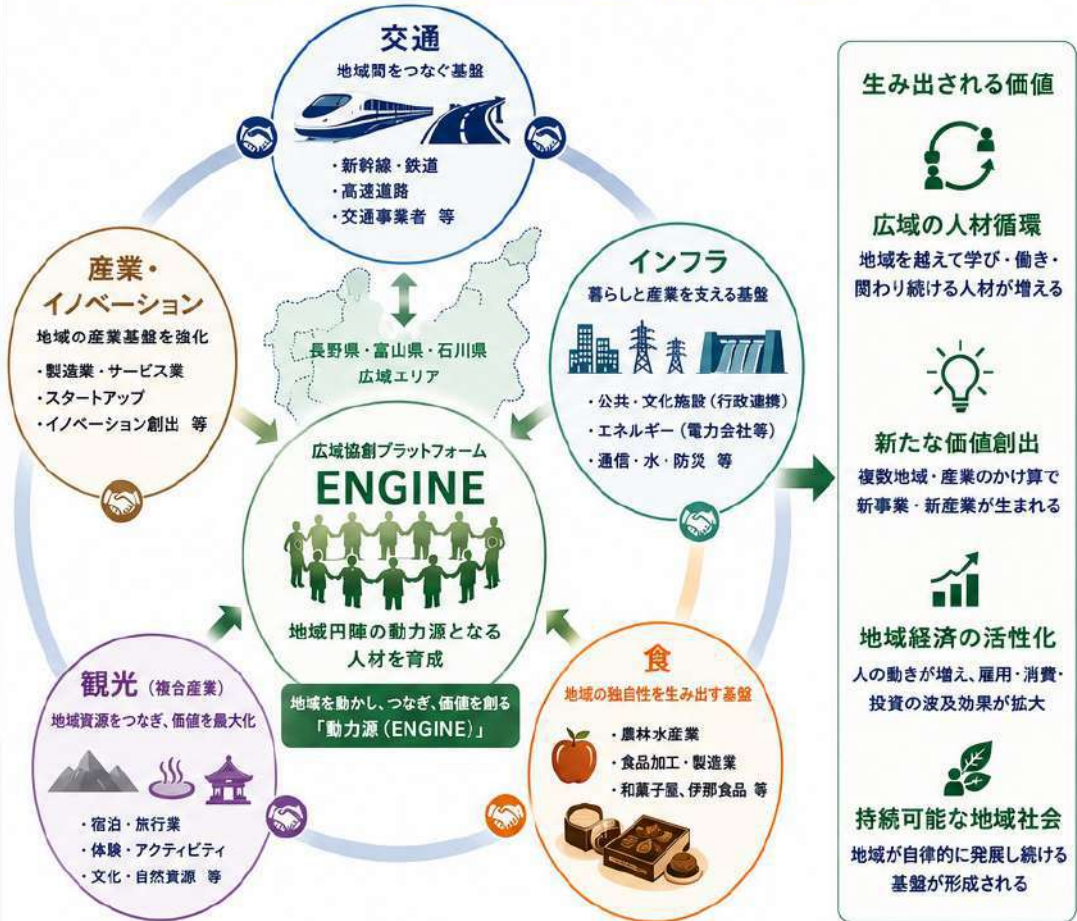
金沢大学
(石川県：伝統・文化・観光・ものづくり等)

企業・産業界
 大学・教育機関
 行政・自治体
 金融機関
 地域・市民団体 NPO等

人の交流・移動・つながりの強化 ➡ 広域の人材循環・協創を実現

ENGINEは、地域や業界が円陣を組む力を生み出す

地域を動かし、つなぎ、価値を創る人材を育成し、
広域での協創を加速させる「動力源 (ENGINE)」となる



ENGINEの本質 行政区画を越え、地域基幹産業をつなぎ、人の交流・移動・つながりを加速させることで、地域の未来を共に創る人材を育て、広域での協創と持続的な成長を実現する

サステナブル社会協創学環の設置

大学・アカデミア主導から地域・社会協創型の学びへ変革

学際・国際・社会との協創による創造知学習

サステナブル社会協創学環の学び

学部の学び

専門を深め、特定の領域のプロフェッショナルを育成

専門ごとに、深く学び、知識や技術を磨く



学部の学びの特徴

- ✓ 特定領域の専門性を深く追求
- ✓ 体系的な知識・技術の修得
- ✓ 高い専門性による課題解決
- ✓ 同質性が高く、安定した強み



同じ種類の木を育てる「専門の林」
強く、質の高い専門を育てる
社会の基盤を支える重要な力

サステナブル社会協創学環の学び

多様な知をつなぎ合わせ、社会の新しい価値を創造する人材を育成

8つの専門領域の「知のブロック」を組み合わせて、新しい価値を創造する



学環の学びの特徴

- ✓ 多様な専門知を横断的に理解
- ✓ 知の組み合わせで新しい価値を創造
- ✓ 複雑な社会課題を統合的に解決
- ✓ 多様性を力に変え、未来をデザイン



多様な木々が共生する「協創の森」
生態系のように循環し、支え合い、
新しい価値を生み出し続ける

生み出す新しい価値

持続可能な社会・環境



レジリエントな地域・都市



ウェルビーイングな暮らし



新しい産業・サービス



多文化共生・共創社会



つなぎ、創る力を育て、未知の社会・持続可能な未来を創る人材へ



つなぐ力



組み合わせる力



創造する力



未来を育む力

コンセプト：リ・デザイン

変化への適応力を持った人材育成と学びのサステナビリティ創出へ — サステナビリティのリデザイン —

1. サステナビリティを再定義する

サステナビリティ=狭義の自然・地球環境という「ステレオタイプ」を捨てる・壊す。



サステナビリティとは、
変化し続ける世界に適応し続ける力

世界は本質的に変化する



変化は必然。あらがうのではなく、乗りこなす、いなす。

サステナビリティ=変わり続けられること
(変化への適応力)

2. カーボンニュートラルの本質的な位置づけ

カーボンニュートラルとは、
脱炭素が目的ではない(あくまでも手段)。

本質は、地球環境の変化・バランスの取れた状態に向けて、人類が社会システムそのものをアップデートするプロセス。



CNは、地球環境の変化に対して、人類が新しい社会システムへ適応する戦略である。

= OSアップデートの必然的な行動

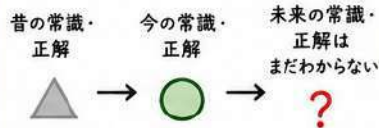
実現の手段(例)



3. 学びのサステナビリティ

変化への適応の根幹を成すもの。

その時々常識や正解は普通とは限らない。



必要なのは、一度学ぶことではなく、
学び続けること。

学びのサステナビリティ
(Learning Sustainability)

人生100年時代において、
大学は学び続けるための伴走者・パートナー



ともに学び続けることで、
人も社会も変わり続けられる。

4. サステナブル社会協創学環 — 私たちの仮説と挑戦 —

サステナビリティを教える学部ではない。

変化し続ける社会を、
多様な専門知と人々との協創によって
デザインできる人材を育てる学環。



学際的・国際的に
地域・企業・自治体と協働・協創



学生だけでなく、大人・地域・企業とともに、
生涯にわたる学びのエコシステムを形成する。

まとめ

サステナビリティとは、
「変わらないこと」ではない。
変わり続けられること。



変化への適応のループ



だからこそ、大学も変わり続ける。
サステナブル社会協創学環は、
私たちの仮説。

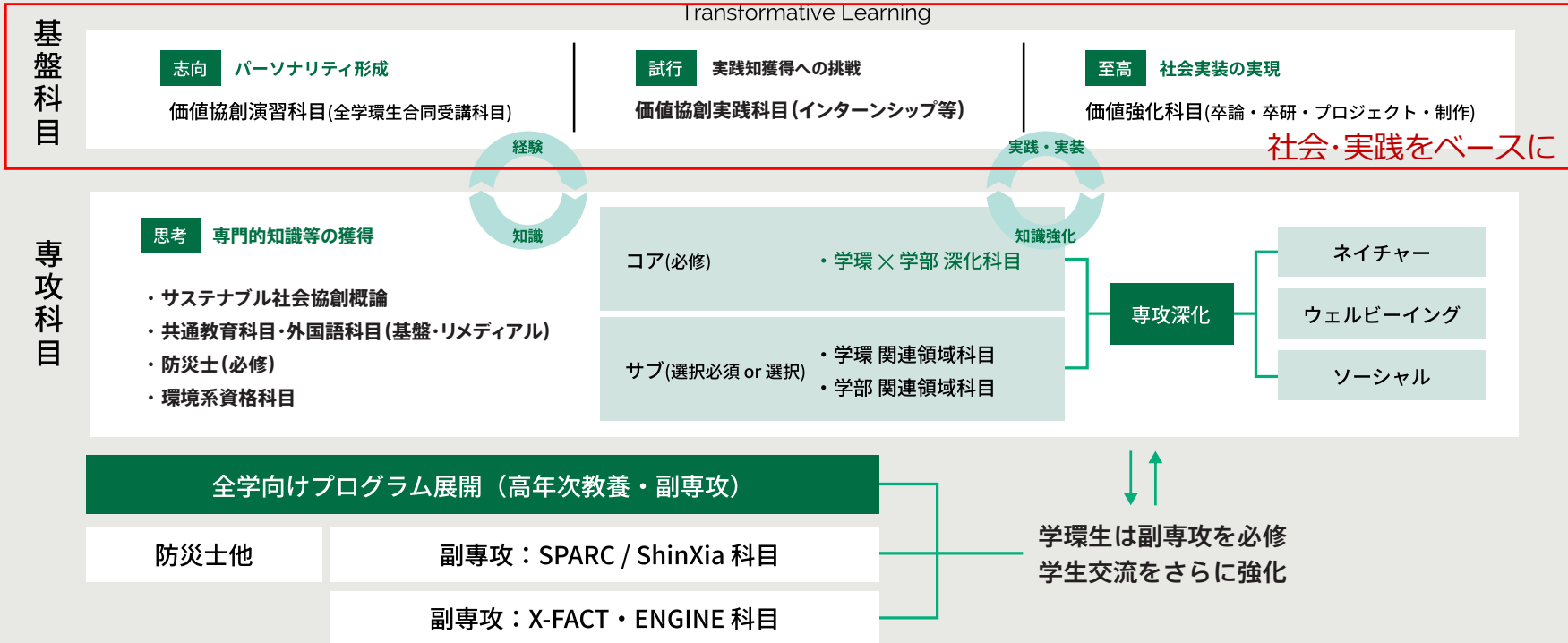
まだ完成した答えではない。
しかし、変化し続ける社会だからこそ、
大学もまた挑戦し続ける。

= 新しいアカデミアへの挑戦



社会ニーズ・実践から学びを形成

先取り — 1年次 — 2年次 — 3年次 — 4年次



カリキュラム例

サステナブル政策入門(1年次)

本授業は、環境・経済・社会を統合的に実現するサステナビリティの学術的な基盤知識、サステナブルな社会を実現するための政策(行政だけでなく、企業等の取り組みを含めた広義の政策)の方法論の習得をめざします。ゲスト講師による講義や現場訪問等を組み入れサステナビリティの現場の学びにより、サステナビリティの概念や方法論を体得します。

エコシステムデザイン(2年次)

本授業では、地域内経済循環や環境共生圏の考え方を基礎に、地域社会の中で持続可能な「エコシステム」をデザイン。単一の課題にとどまらず、農業・エネルギー・観光・福祉・教育など、複数の要素が連動する仕組みを捉え、地域全体の再生像を描きます。学生はフィールド調査や地域関係者との対話を通して、既存資源を再編集し、新たな循環モデルを提案します。個別の解決ではなく、複数のシステムが重なり支え合う「共生的地域デザイン」を実践的に探究するプロジェクト型で行います。

グローバル協創実践(3年次)

多様な文化背景の人々と協働し、国際的な視点で価値を生み出すプロジェクト科目です。異文化コミュニケーションや協創デザインの理論を土台に、国内外の大学・地域・企業と連携したプロジェクトに挑戦します。